

空に映る海の色

馬場駿

1

十数本のマストの向こうに、霧で麓(ふもと)を隠された小さな山が、まるで薄緑色のおにぎりのように並んでいる。いましがた舳先(へさき)を大きく回して避けてきた防波堤の先端を振り返ると、テトラポッドに当たった砕けた波が、濃墨色の空をバツクに白い扇と化したかと思つと、一瞬にして消え去つた。この海の荒れ様は、発達した低気圧の接近が天気予報官の予想以上に早かつたということだろう。

小松は、肌寒さと通り過ぎた沈没の恐怖でブルツと身震いをしたあとで、ボートを繋いだロープをもう一度確認しようとして、素足を海水に浸しながらしゃがみこんだ。

「おい、ボク、危ないぞ」

愛艇の曲線の先に濡れ鼠になつて海を見ている男の子を見つけたのと、声を発したのがほとんど同時だった。男の子

は何かによつたかのように、両の拳を硬く握り締めて微動だにしない。見れば小学校に入るか入らないかぐらいの年齢だ。

「どうしたの？ なにか落としたの？ 波が持つて逃げたの？」

小松は男の子に近づきながら声を出し続けた。驚かさなためだ。そんな配慮が必要なくらい彼は、自分だけの世界にいるように見えた。

小松は、ペットに接するときの心得を思い出し、同じ身の丈になるように膝を抱えてかがみ込んだ。急に粒の大きさを増した雨が目の中に飛び込む。とにかく何か聞き出して保護しなければと、そればかりがせかれた。

「どうちゃんが」

「え？」と小松は思わず首をかしげ、耳をそばだてた。

消え入るような声だった。

男の子はハーバーの揺れる海面を指差し、小松の顔を見

た。

「どうちゃんがいるの」

「ババが溺れたの？ いつ？ 今？ 今日のこと？」

「ちがう。ずっとまえ」

そう言う男の子の小さな目が赤い。雨のせいなのか。それとも泣いていたのか。

「方ぜひくよ、ボク、おうちどこ？ 送つて行くから教えて」
小松は自分の言葉に気付かされたように子どももの額(ひたい)に掌を当てた。かなり熱い。

「いけね、肺炎になる」

小松は質問する前にやるべきことがある、と携帯電話を手にした。

「あ、女将、すぐ救急車呼んでくれる、いま港、どこの子か知らないけど雨の中で肺炎になりかけてる、いまから行くから浴衣と、それから毛布、ハイ、よろしく！」

そして、電源を切るのもどこかしく、「さ、ボク、お医者さんへ行くよ」と言うやいなや小松は、子どもを抱きかかえると、松並木の先にある定宿しおのね潮の音『目指して走り出した。』

男の子は何の抵抗もしなかつた。
後つてまた波が砕け散る音がした。

曇天の日は空と海がつながり、水平線が溶けてしまうと
いうのは嘘だ。現実には目の前の海は、晴れた日以上の明確

さで二つの世界を分けている。遠い、遠い、遙か彼方の明るい空がそうさせているのであろう。

滞在が四日目に入った。

肺炎騒ぎは幸い空振りに終わり、南部救急病院での注射一本で男の子の熱は引いた。

あの日……

報せを聞いて駆けつけた母親の私に対する態度はひどかつた。

「こんな小さい子を、体の弱い子を、連れまわしてずぶぬれにして、あなた恥ずかしくないの、立派な誘拐よ、これは。わたし黙ってませんからね」

端正な顔からは想像もつかない激しい言葉の数々が、今も耳に残っている。

小児科の井上という医師が見かねてか、「相変わらずの大バカもんがあ、人を見てものを言え」と彼女を怒鳴りつけた。

「相変わらずの」という言葉からして、医師は母親をよく知っているらしい。

付き添って病院にいた宿の女将も、医師の言葉を引き継

いで、負けず劣らず凄かった。

「ほんとにバカ言つてんじゃないよ、こんなご時世、道端で人が倒れてたつて知らん顔する人が多いのに、見ず知らずの子どもを担いで雨ん中走つて、病院まで付き添つて、オロオロ心配して、こんないい人に向かつていまのはなんたい。そんなに大事な息子なら首に縄付けて柱にでもつないどきな」

小松は、母親、井上医師、「しおのね」の女将、男の子、それぞれ顔を思い出して頬を緩めた。大人たちが言い争う姿と、そのすぐそばでスヤスヤと眠っていた男の子の穏やかな顔のアンバランスがなんともおかしかったのだ。それに輪をかけて、母親に非難されて「すみません」と頭を掻かいた自分自身の姿が……

「誘拐犯か。なつてもいいかな」

そう思わせる魅力が、傍（かたわ）らで海を見ているこの男の子にはある。

「おじさん」

急に男の子が呼びかけてきた。

「うん？」

「おソラのいるがうつつてるのウミだけだよね」

「ボク、それは反対だ。海の色が空に映つてるんだ」

「うそだよ」

「空より海の方が偉いんだ。その証拠には、空には魚がいないだろう。大将が家来に色をつけてやつてるつてところかな、ウン」

「でもおソラにはトリがいるよ」

「海にだつて鳥はいるさ、ほらあそこ」と小松は沖のカモメを指差した。

「あの波乗りしている白いのはなーんだ？」

「トリ」

「ほらね、海の方が偉い」

「でもね、ヤマのほうにいつてもおソラはあるけど、みどりいろはおソラにうつつてないよ」

「どうきたか。うん、そうそう、山と空だと空の方が偉い」

「でも、おソラがあおいときでもヤマはみどりいろだよ」

「あつ、と」

「へんなの」

「こんな小さい子に負けていれば世話はない、と小松は唇を小夫とがらせた。同時に可笑おかしさと楽しさが同時に

に湧いてきた。

「おじさん、おしごととは?」

仕事のことを聞かれたのは意外だが、別に深い意味は無いのに違いない。そこでハタと気が付いた。学校はどうなっているのだろうか。病院ではたしか六歳十ヶ月といつていた。学齢に達している。インフルエンザ休校が起きる季節でもないし、春、夏、冬の学期末休みでもない。しかもこの子とかわつた四日間ともウイークデイなのだ。

「ボク、学校は? 一年生だろ」

「ボク、カイト。なま・え」

きちんと名前と呼んで、との抗議らしい。

「ごめん。そういえば病院で名前聞いてた、先生から。海の人って漢字で書いて、海人くん。あの先生、掛かりつけのお医者さんだつたんだね」

「かかりつけって?」

「うーん、いつも診てもらつているお医者さん」

「そんならシジイだよ。かあちゃんがそういつてもん」

またやられた、と小松は、右中指でまた、自分のこめかみを掻いた。

「どこか体が悪いの?」

何か病気が原因で登校していないのかもしれない、と小松はようやく理由らしきものに辿(たど)り着いた。

「むねがよわいんだつて、ボク」

「そうか、それでよく熱が出るんだな」

「ほんとだね」

「うん」

「ここにきちやいけないんだ、ボク。おうちでアンセイにしてない」と

「マはどうしてる? いま、この時間、おうちにいる?」

「おしごと。ひもの、つくつてるんだ、じいちゃんちで」

それで、なぜおじさんは「おしごと」してないのか、と聞いてきたのだ。

「そうか、誰もいないからおうちを抜け出してくるんだ」

「うん、とうちゃんにあえるかもしれないし」

そう言ううと海人は、出会つた日のように、また拳を固めて海面を見つめ出した。息を止めて、苦しさを共にしていれば、父親が海の底から、生きて浮かび上がつてくると信じている。そんな感(かん)じでた。

小松は胸が詰まった。

海人の父親は浜でも有名な泳ぎの名手だったという。近

くの海水浴場では、毎年のように人命を救助し、自宅の鴨居の上は感謝状と表彰状でギッシリだと女将に聞いた。その泳ぎ自慢が命取りになった。夏祭りで浴びるほど酒を飲んだ後で彼は、可愛くて仕方が無い海人にせがまれ、誰もいないハーバーに遊びに来た。海人が水際で遊んでいるのを見守るはずが、日光を全身に浴びていつしか酔いが回り、防波堤の上で眠りこけたらしい。このときの親子の位置関係は、たまたま入ってきたヨットのオーナーが海上から確認している。海人が過あやまつて足をすべらせ、それを見たオーナーが大声を上げた。父親はその声で目を覚まし、海人を助けるべく防波堤から着衣のまま海の中に飛び込んだ。海人は溺れたわけではなく、舟の引き綱につかまつて自力で安全な場所に戻つたが、父親は心臓麻痺で帰らぬ人となった。一年前のことだという。

『しおのね』の女将は言った。

「熱を出すから駄目だつて、この間の井上先生に何べん注意されても海につれていきましてね。潮の香りで海人の体を強くするんだつてききませんでした。それはそれは子煩悩でしたね。産婦人科の先生に、この子は長くもたないなんと言われたものだから、必死で可愛がついてたのかもしれない

ません」

「きつと帰ってくるよ」と小松は、海人の頭を撫でた。

「うん」

誰がとか、何処からとか、聞き返してはこなかった。

まだ残っていたであろう海人と自分との間の心の隔たりが、一気に縮んだような気がした。

宿の板長自慢の海鮮料理を堪能した後で小松は、三階にある客室から夜の海を見ていた。

虫が入るといけませんから障子だけでも閉めまじようと言う仲居に、気遣いに対するお礼は言ったものの、開け放つたままにしてもらい、海の香りを心ゆくまで愉しんだ。

耳を澄ませば、小さな潮騒も聞こえてくる。

「沖の遙か遠くの方で海を揺らしている誰かがいる。波が浜に押し寄せてくるのはそのせいなんだ」

小松は、心の中で創つた台詞を声に出してから、一人合点でうなずいた。

「よし、こんど海人に会ったらこれを使おう」

もう少し砕いた言い方しないと大人向きに過ぎると思いい、首をかしげた。

「波子さんか……」

想いがあちこちに飛ぶ。

誤解がとけた後で、海人の母親が手をついて謝った。

そのときの所作の一部始終がよみがえってきた。

髪を後ろで無造作に束ね、眉も整えず、化粧皆無の顔で彼女は、「すみません」ではなく、子どものように「ごめんなさい」と言った。顔をあげた後、右手の甲で右目をこすり、ついで小さく水漉みずっぱなをすすった。見る間に両の目が潤い、涙があふれ出て頬を伝い、顎(あご)から滴(た)りたり落ちた。痣(あざ)のついた膝小僧(ひざこぞう)が二つ、スカートから飛び出ししている。腿(もも)ふとももに置いた手でしきりにスカートを握り締めるからだ。その指のほとんどが、救急絆創膏(きゅうきんそうこう)で白く覆われていた。

小松はそんな波子を、掛け値なしにきれいだと思った。

「わたし、あの子が死んだら、何て謝つたらいいか」

亡き夫の、今このときの想いが伝わってくる言葉だ。

透き通った涙が、いつまでも波子の顔を洗い浄きよめていく。濡れた睫(まつげ)の奥の瞳(ひとみ)が、沈むように黯(くろ)くろい。

小松は、見たこともなく、この世にもいない男に、理不尽

ともいうべき嫉妬(しつと)を感じた。

「ぼっちゃん」

後ろから来た女将(によう)の声で、小松は我(わが)に返つた。

「常務(じょうむ)さんからお電話(でんわ)です。そのままお部屋の電話(でんわ)でどうぞ」

「すみません、三井(みづい)は、ケータイにかけるのが嫌(きら)いで」

「ふふつ、それなら実は私も。ときどき、プツンときれたりして、相手に気をつかいますし」

女将(によう)が笑顔(えんご)を作(つく)って肩(かた)をすぼめた。

「はい、小松(こまつ)です」と、部屋の襖(ふすま)が閉(と)まるのを見届(みと)けてから、受話器(じゆわき)を手(て)にした。

小松(こまつ)の父親(ちち)親(おや)、忠興(ただおき)が逝去(しよきよ)して次期(じき)社長(じやうちやう)候補(こうぼ)が乱立(らんたつ)したという。三井(みづい)によれば、その中でも田嶋(たじま)専務(せんむ)は急激(きゅうげき)に派閥(ははつ)を拡大(くわくだい)し、社長(じやうちやう)の世襲(せじゆ)制(せい)を非難(ひなん)して、ついには決起集会(けつきしうかい)まで開(ひら)いたという。小松(こまつ)はどろどろした権力(けんりく)闘争(とうそう)の話(わたり)を聞いて嫌気(きら)がさし、体(てい)ていのいい放浪(はうろう)生活(せいかつ)に終止符(しゆしご)を打(う)つて、父親(ちち)が愛(あい)してやまなかつた海辺(うみべ)の定宿(じやうじやく)「しおのね」に、一人籠(ひとりかご)もりに来た。

それでも追(お)いつてくる社長(じやうちやう)就任要請(じゆにんようせい)という名の強迫(きやうはく)。

「三井常務、ぼくは器しやないし、好きな絵を描いて、もの静かに生きていきたいんです。分つてもらえませんか。経営は大勢の人の生活や人生を預かる難しい仕事、社長の長男というだけで担えるはずがないでしょう。第一僕は精密機械について何も知りません」

電話の向こうの常務の言い分はこうだ。専務派の横行も、元社長派の迷いも、その他諸々のゴタゴタも、世襲で社長が決まれば一瞬してなくなる。混乱といつても所詮その程度のもの。社員みんなのためと言うのなら絶対に就任しなくてはならない。また経営実務は、自分をはじめ亡き社長恩顧の者たちが必死で行い、新社長には絶対迷惑はかけない。

常務からの電話で心を乱された小松は、女将を部屋に呼び戻して、いつものとりとめのない会話を始めた。

「ぼつちゃんの絵、すてきですね、なにかこうホンワカしてて、見る人の心の中からあらゆるわだかまりを取ってしまうような」

いま描いている油絵のモチーフが向日葵(ひまわり)なのに、バックの空が黄色で、花の方が、濃さの違う空色だと話すと、女将が両の掌を重ねて言った。

「女将、それ、褒めすぎ」

「いいえ、お父さまも、あれは使い物にならん、あらご免なさい」

小松は笑って話の先を促(うなが)した。

「口ではそうおっしゃっていましたが、このお部屋で坊ちゃんの絵を見ながら、二三コしてお酒を召し上がってましたよ。わたしなんかこんなこと申し上げちゃ何ですけど、お父さまが生きていらしたら、会社の経営みたいなものに坊ちゃんを巻き込まないんじゃないでしょうか」

「会社の経営みたいなもの、か」と小さく声に出して小松は、コクリとうなずいた。

「女将、会社の話じゃなくて、そう、たとえば波子さんの話」

「あららら、あんなに毒づかれたのにな」と女将が口を押さえて笑った。

「なぜスピンなんです？ 二元があれだけいいのに」

女将の顔から笑みが消えた。

「怒らないでくださいね」

「ええ、もちろん」

「坊ちゃん、肉体労働でお金稼いだことあります？」

虚をつかれた感じたが、小松は誠実に記憶をたどった。

「ありま、せんね」

「あの日の波子さんの格好から、顔や髪を含めてですけど、必死な生活とか肉体労働を連想しない人の方が珍しいんですよ。忠洋ただひろさんはやつぱりお坊ちやま。彼女は化粧しないんじゃないかと、する余裕がないんです、精神的にも、経済的にも」

それは決して小松をバカにした口調ではなかった。浮世離れした感覚の三十男を、どこかで羨ましく思っている。そんな感じだ。

「どうせ額の汗で崩れるからと初めから化粧をしない女、爪にアートするなんて夢物語で、爪といえは貧しさのたとえそのままに火をともしただけ、そんな女もたくさんいますよ、坊ちゃん。波子さんもその一人」

小松は、母親に諭さどとされているような快感を覚えた。耳に優しいのだ。

「あらご免なさい、生意気なことを」

「いえ、ありがとごうございました」

女将は、なぜか瞬きを繰り返して、急に思い出したというように、お盆の上のビールを手にした。

「きょうは漁いさり火が見えませんねえ」

小松はそれには応えず、コップの中で暴れまわるビールの泡を見つめながら、「夜の海は、減色混合です。昼間の色という色をみんな混ぜてしまつて、個性を失いつくした黒」と、真面目な顔でつぶやいた。

「坊ちゃん……」

「はい？」

潮風がフツと二人の間を通り過ぎた。

「ほんとに変な人ですね」

「それつて、ほめ言葉ですよね？」

「はい」

女将が文字通りこころと笑った。

何々丸と漁船の名前をそのまま看板にしたひもの屋が、国道の両側に蜿蜒(えんえん)と続いている。

小松はタクシーの運転手に、長いトンネルの手前で左折するように言った。漁港の周りの集落に通じるはずだ。

「遠い」親戚かなにかをお捜しで？と、停めさせた場所で釣り銭を出しながら、運転手が微笑した。

停車場所を、小松が再三再四迷っていたからだろう。

「たしかに遠いな」と笑顔を創つたあとで、「お釣りは収めておいてください。それとこれはお願ひなんです、三十分ほどしたら、ここに戻つてきてくれませんか。いえ、もしそのとき貸送中でしたら、空車になつたそのときでけっこうですから」と頭を下げた。

「はあ……と訝(いぶか)しげに小松の顔を見詰めた彼は、「でもねえ、来たとしてお客さんが待つてゐるって保証はないし……」と、わざとらしい溜め息をついた。

「これはうかつでした。ではこういうことで」

小松は、財布から五千円札を出して運転手に押し付け、ここにずっと待たせたとしても充分な金額だ。

「わかりました。必ず」と彼は、相好(さうごう)を崩(やぶ)した。

波子がこの辺りに住んでいたり、彼女の祖父の作業場があつたりする可能性は、ほとんど無い。ひもの、漁港、集落、海岸の四つをキーワードに、自分なりに地図で探し、あたりをつけて訪ねてきたのだ。別に波子そのものが目的なのではない。なぜなら、もしこの旭町が波子の住所地なら海人は、二キロ以上も一人で歩いて、いつものヨットハーバーに来ていたことになるが、それはありえないからだ。ただ、波子が吸つてゐると同じ、魚の匂いを連れた潮風の中に

立ちたかつた。それだけのこと……。

心懐(こころな)かしい下町の路地。そんな感じがした。二、三メートルほどの狭隘(せうがい)な道を挟んで、小さな間口のしもた屋が軒(のき)を連ねている。それぞれの家がわずかばかりの縁を、それでも精一杯可愛がつている。たくさんある、どの路地の先端にも判(わか)りぬくように、灰白色の防波堤と青い海があつた。

民家そのままの八百屋には、飾り気の無い、とれたての野菜がていねいに並べられ、あること自体が不思議に思える小さなガソリンスタンドには、縄が張られ、「本日定休」の札がゆらゆらと揺れていた。軽自動車だけを標的にした小さな貸し駐車場。山腹から道路まで一気に降りてきている墓地。バイクの郵便配達人が、路地から出てくる度に小松をチラチラと見る。そのいずれもが、のどかすぎる「景色」だ。

約束の三十分は瞬(とこ)間に過ぎた。

直射日光を浴びながら小松は、アスファルトの上で、タクシーをひたすら待った。路線バスが時を違(ちが)えて二、三、小松の前をのそのそと通り過ぎて行つた。

『約束したから』

小松は焦(じ)れて路線バスに乗るよりも、待つこと、そのことを大事にしたかった。

通りすがりの肥った猫が、小松の前で足を止め、そのくせ顔は背けたままで、ニヤールと鳴いた。

2

ヨットハーバーと言っても実際は、地元の釣り船や小さな漁船が同居している小規模なものだ。外海から港を護る防波堤も、魚が連なつて泳いでいる。ペイント画がついていて、ハーバー全体が子供じみた雰囲気だ。碇泊(ていはく)していているヨットの名前からして童話的で、ピノキオ、マーメイド、ピーター・パン、ガリバーⅡなどなど。そういえば、近くに地元高校ヨット部の倉庫もあった。これもまた、外壁に恥ずかしいほど大きくその旨記(しる)せられている。船底を丸ごと晒し、足をとったイカの干物のように擁壁に立てかけられた色とりどりのボート。小型漁船を引き上げるための勾配(こうばい)五パーセント程度のスロープに、一定間隔で続く、摩擦よけの丸太が描く抽象画。

父親がこよなく愛した海の一画を、小松もまた愛し始め

ている。

海人がそこにいて、海と遊んでいるから。

その海人を産んだ母親が、あの波子だから。

真上から照りつける太陽で、頭と肩が熱い。コンクリートのスロープを波が熱がりながら登ってくる。戻るときにくつもの輪を作り、その輪の影が白く揺れて輝く。

「影が黒いなんて誰が決めたんだ。分ってるさ、そいつはきつと海を知らないんだ」

小松は詩人になりきって、両手を広げ、声を張り上げた。「ああ、海の水が光の力をかりて、舟によし登ろうとしている。ゆらゆらと、半ば、ためらいながら」

小松には、ヨットの船体に反射する光の輪が、海水の分身のように思えた。

「おじちゃん」

「ん？」と小松は、海人の声がした方へと向き直った。

「かあちゃんだよ」と海人は、胸を張って指差した。

小松は一瞬、息を呑んだ。

この前の波子とはまるで別人の「女」が、少し固い表情を見せながら近寄ってくる。

ていねいに梳かれて光沢が出ているストレートな長い髪。

優しく細く弧を描く肩。地肌の小麦色が残るひかえめな化粧に、オレンジの口紅。ちよこんと頭にのせたおしゃれな麦わら風の帽子。ノースリーブのワンピースには白地に大輪のヒマワリの花だ。

その全才が自分との再会に向けられたものだとしたら。

小松は小さな感動をおぼえた。

「先日は失礼しました」

帽子をとるときに、髪がファサツと揺れた。

そこはレストランと言つよりむしろ展望室に近かった。

ハーバーから距離にして五キロ隔たり、標高にして二百メートルほど上にある絵本美術館から見下ろす海は、深い緑色の器の端に盛られた真つ青な果実のように丸かった。水平線の先にたまたま白い雲の帯があり、海の青と空の青とは繋がつてはいないが、その辺りを除けば、どちらがどちらを映しているのか分らないほど同じ種類の青だった。

それでも海の方が勝つた。

小松の中でそのことは動かない。

海人は美術館内のレストランに入るとすぐに出窓の側に陣取り、ウエイトレスが来ても、波子が注文した。パフェが来

ても全く見向きもせず、ひたすらパノラマを楽しんでいる。「誰といらしたんですか、ここに」

不躰ぶしつけとは思つたが、小松は聞かずにはいられなかった。

「海人の父親です。彼、別に絵や本が好きと言つわけではないんです、高いところが好きだっただけ」と波子は微笑した。

笑うと右側にだけ笑窪えくぼができる。それも、ほんの小さな。

「どんな人だったのかな」

「ごく普通の、呑ん兵衛。お祭りとお海が好き、どちらかと言えば乱暴者、それと、女好きの」

「それでも愛した……」

「いえ、そういう人だから一緒に暮らせるって思つたんです。温かければ、ほかに何もいらなかつたし。男の人からいろいろ望まれるのつて辛いじゃないですか、わたし、何にもない女だし」

「何かあるかないかは、当の本人以外の方が、決めるんじゃないかな」

「じゃ言つてください。わたしにあるもの」

波子の瞳が一回り大きく変わった。

小松は重いひとことを言ってしまうので口ごもった。

「やつぱりね、いいんです」

波子は小松の沈黙を悪い意味にとった。

「そうじゃなくって、僕、会つたばかりなのに軽率なことを言いそうで、それで」

「軽率なことって？」

「ずっと想っていました、あの病院での出会いから、あなたのこと、みたいな」

背中から汗がドツと噴き出した。

「それが軽率……」

「いや、何言ってるんだろ」

「海人、行きましょ」と波子は急に席を立て、言った。

「こんなところへ誘つてごめんなさいね。そうね、心のどこかで何かを期待してたんだわ、こんなお化粧なんかして。笑つてください。港の近くのレストランや喫茶店はこわかったんです、噂になりそう。子持ちの未亡人がいい年をしてつて。そういう田舎なんです、この辺。バカな女です、わたし」

何か言わなければ終わってしまう。

「噂になりたいって、言つたら？」

「海人！。フツはいいの、下で買つてあげるから」

海人がかぶりを振つてイヤイヤをした。そのあとで、『かあちゃんが悪い』とばかりに波子をにらみつけた。

「お付き合ひしてくださいって言つたら？」

小松は自分がかどかしかつた。どこかで理性がブレーキをかけている。仮定型でしかものを言っていないのだ。その小ずるさに、自分自身に吐き気がした。

「本気で言ってくれたら考えます。失礼します」

海人は波子に手を引かれながらも何度も振り返り、すがるような目で小松を見た。

「おまたせしました」と、コーヒーがテーブルの上に二つ置かれた。

「きみ、一緒に飲む？」

小松はやけになつて、ジョークを飛ばした。

「本気で言ってくれたら考えます」

若いウエイトレスは波子と同じ台詞を吐いて微笑をした。

耐圧ガラスの向こうの、遠くの海が、いつそう遠ざかつたように思えた。

『考えます、か』

可能性は残っていることになる…。

「あの、お客様」

ふと気がつくくと、支配人風の男性が立っていた。

「待たせていたタクシーは、お連れの方が乗っていきました。よろしければお客様のために、別のタクシーを呼びますが」
確かに歩いて定宿に戻れるという距離ではない。言葉の齟齬、心の行き違いはともかく、なぜ、一緒に帰らなかつたのだらう。まったく間が抜けている。

小松は自嘲した。

「ありがとうございます。呼んでください、浜の『しおのね』という旅館までと言ってもらえれば」

陸に引き上げられた漁船の甲板でボーっとしているところへ、紙切れを握り締めて来た海人が、それを表彰状のようにかざし、「かあちゃんからおじさんに」と言った。

受け取ると海人は、嬉しそうに笑って船のそばから離れ、江(みぎわ)に降りていった。

小松が船から飛び降りて、ゆつくりとそれを追う。

紙切れの中身は意外にもボエムだった。

『海』

波子

海人は海に入りたい
たぶん。パパがそこにいるから

海人は海に入れない
きつともう。パパはいないから

わたしは海に入れない
浜で海人がいきているから

わたしは海に入りたい
ひとりぼっちが っらいから

「上手いもんだな」と小松は、後頭部に両の掌を当ててまばゆい空を見上げた。

小松は海人を一度、父親の忠興が遺してくれたフィッシングボートに乗せようとしたことがある。沖に連れて行ってやろうと思ったのである。ところが海人は足を踏ん張り、

つないだ手を引き解こうとして頑張った。小さな唇を噛み、眉根を寄せ、必死で拒もうとするのだ。

波子のボエムは、期せずしてあの日の海人の行動の意味を教えている。

「親はずごいな」

小松は、息子の本質を見抜いていた忠興と、母としての観察眼が鋭い波子に、畏敬という共通のものを感した。

海人が小松に駆け寄り、ジャージの端を引いた。

「ねえ、キラキラ、すごーいよ」

指差す方を見ると、ユラユラと揺れる水面に日光が乱反射をしている。

「海人、あのキラキラしているところを見ながら目を細くしてごらん。そう、もうちよとで目をつむるつてところまで」

そう言いながら小松は、自分も目を細めた。

一つ一つの輝きの真ん中から、光の筋が空に向かって立ち上がる。それは逆に、太陽の光線が水面に向かってふりそそぎ、さらには突き抜けて、海水の下の砂に刺さっているように見える。

「うわーっ、きれい」

「そうそう、海人のこころと二緒だ」

「ねえ、このキラキラふんではない？」

驚いた。海人が裸足になって海水の中に足を踏み入れたのだ。海に対する潜在的恐怖、確か、それがあつたはずなのだが。

小松はボエムをポケットに仕舞うと、臆すねまでジャージをまくつて、海人に做った。

光の精たちの向こうには、フジツボを身にまとった深緑色の石が庭石のように並んでいる。名前も知らない背の低い海藻が、右に左に揺れて微細な砂を舞い上げる。海人が小松を見上げる顔が明るく光る。

『ひとりぼっちじゃないよ、波子さん』

海人がいる。その海人より少しだけおとなの自分がいる。

小松は、チャプチャプと水音をたてて足踏みをしながら、自分を励ますように何度もうなずいた。

小さな波が沖からやってきて、波頭の白さがようやくやく崩れると、今度は砂浜をすべるようにして小松に近づいてくる。

小松は、宿での夕食の後、浴衣姿で一人、松並木の東側

にある砂浜にやつてきた。三井常務がもうすぐ、「社長不就任の最終確認」という役目を果たすため、携帯電話に連絡を寄越す。小松は、父親が愛した宿の中で回答することは避けなかった。生活できるかどうかはわからないが、齡三十七、残る半生をひたすら絵を描いて生きよう」と決めたからだ。心のどこかで、父親に謝罪をしている。

今朝、ハーバーのことだ。

「海人くん、舟はなぜ沈まないか知ってるかい？」

「うん、木でできてるから」

「おじさんは違うと思うなあ、海に嫌われていないからさ」

「え？ じゃあ、とうちゃん、海にきらわれてたんだ」

たつた二言で小松は、海を、心の狭い嫌な奴にしてしまったことを悔いた。

海人は、たぶたぶとうねる海を睨みつけていた。

「ごめんな、海人。すみません、海人のお父さん」

夜の海が小松の爪先を洗って戻っていった。

想いが勝手に動く。

「なんだ、女将だったんですか、あの日の波子さんのスタイルリストは」

「あら、ご迷惑でした？」

「いえ、とんでもない。とてもきれいでした、彼女」

「それで向日葵の柄だったのだ。」

「いつそお嫁さんにしたいほど？」

女将が覗き込むように言った。

「ええ」

「それで、坊ちゃん、言ったんですか、ちゃんと好きですって」

「いや、ためらいが勝ちました。だめですね、僕って」

「そう、ためらったの？ じゃ、本気なんだ、坊ちゃん」

「え？」

小松は首をすくめて笑った。遊び目的の男は肝心なときにためらったりはしない、という女将の言葉を思い出したのだ。

横になると、浴衣を通して昼間の砂浜の温もりが伝わってきた。

目の上に黒く見える松の枝葉。その彼方に濃藍の空。星が一つ一つ、はつきりと…。

目を閉じると、波子の白いワンピースの柄、ひまわりが目蓋のスクリーンいっぱい広がった。

『あしたも晴れる。そしたら海人と波子さんを釣りに誘お

う」

舟の上から手を差し伸べたら、二人のうちどっちが先に手を出してくれるだろう。

いや、どっちの手が先であつて欲しいのかな。

小松はそんなことを考えながら、口元をほころばせた。

3

「えっ、現在の社長は貴方……三井常務？　じゃあ、次期社長の人選で混乱で、あれは何」と小松は、海辺で大声を挙げた。

「社長の遺言で、いいですか、坊ちゃん。死後すぐに代表取締役になるのは私、三井と決まっていたんです」

「そーかあ、いや、おめでとー」

それなら何の迷いも問題も無いではないか。

「いや、そうではなくて、参りましたな。遺言といつても、坊ちゃんはずぐには社長就任を承知しないはずと踏んだ社長が、深慮遠謀で社内向けに認めたためたものでしてね、その、つまり私の社長の椅子の期限は六ヶ月なんです」

その期限があと一と月で切れると、三井は電話の向こう

で、ため息混じりで言い放った。そうでなければ、なぜ専務派が社長の座を狙つて蠢ごめくのか、と。

とにかく、あと二十日以内に、旗幟(きし)を鮮明にして欲しいと、三井は譲らない。

すでに就任しないことを明らかにしていると言うと、「電話が変で聞こえませんでした」と、とぼける。このあたりなかなか老獪(らうかい)だ。

「坊ちゃん」と、さらに三井は、追い討ちをかけてきた。

「当社の株式ですが、坊ちゃんが社長から相続したものは、当然発行済み株式総数の過半数を上占めています。これを一体どうなさるおつもりですか。坊ちゃんはすでに亡き社長の包括承継人になつています。配当だけ受けて、あとは知つたことかと、そういうことでしょうか」

「待つて」と小松は、目の前に三井がいるようなつもりで、右掌を突き出して制した。

株式を自分に譲渡しろということなのか……。そうとも解せる。自分は初めから社長にならないと言っている。それでも全株式の過半数を手中に収めない限り、三井の基盤は脆弱(ぜうじやく)しか無い。それくらいは世間に暗い自分でも分かる。

「過半数を占めているということは、僕の意向で、つまり僕の議決権行使如何で、暫定でない社長が正式に決まるといふことだよな」

「え、ええ。そうなります」と、三井の声が少しだけ震えた。「さつき、社内向けの遺言といったよね、そうすると田嶋専務も内容を知っている…」

潮風が、たぶん東京に届いている。二人の沈黙が、それを可能にしているはずだ。

「三井常務」と、小松は凜とした声で言った。

「はい」と、消え入るような声が聞こえた。

「田嶋専務が世襲反対を唱えて集会を開いた云々はあなただの嘘だね。彼は決定権者たる僕に真正面から嫌がらせをするなどという馬鹿ではない。相続した株式の多寡比率を知らなかった僕は、馬鹿だけだ」

策士、策に溺れるとはまさに三井のことだ。

「坊ちゃん、誤解しないでください」

「三井常務いや、三井社長、明日田嶋専務を同道して『しおのね』に来なさい。一泊するつもりでね。否やは許さない」小松は現オーナーとして、命令口調で言った。自分でも顔が引き締まるのが分かった。

「はい、おつしやるとおりにいたします」と、耳を劈つんぎくような大声が返ってきた。

この日小松は、女将に接待役を演じてくれるように頼んだ。第三者的な立場で、小松自身を含めた三人の人間の、本音の部分を探つて欲しいからだ。

女将は、さも嬉しそうにこの「大役」を引き受けた。

「三井さん、田嶋さんの本音はどうでもいいんです。たぶん見え見えでしょうし。それよりわたしは坊ちゃんの本音を探りたい」と言う。

呉越同舟とはこのことかと小松は、苦笑いをした。

同じ会社の臨時社長と専務が、目を背け、固まつたまま鎮座している。

宴席は、『しおのね』の最上階にあり、故忠興が「仕事の話をするのは無粋だがやむを得ない」と言つて、緊急時に限つて使つていた個室だ。二十畳の和室の奥に十畳の次の間があり、その戸襖とぶすまを開けると、国道を隔てた幹から張り出した松の枝が目の前にまで迫っている。そのお陰で、行き交う車両や人は全く見えず、針葉の束の先に一色(ひといろ)の海が広がっているだけだ。

小松は、自分の大名膳を上座に置かせた。趣味や常日頃の好みには反するが、今回は敢えてそうした。

女将と見れば、京都の間屋から生地を直接仕入れて仕立てたという、取つて置きの和服で、いつもよりかなり念入りの化粧をしている。

「忠洋さんは就任なさらない、というのは本当ですか」と、型通りの挨拶が済んだ後で、田嶋が大上段から切り込んできた。白髪だが年齢はまだ五十、その瘦身からは想像もできないほどの大声を出す。まっすぐな背骨が絵的にも優れている男だ。

「社長にはならない、絵を描いて暮らしていくと、何度も何度も三井に伝えている」

いつもなら、三井さんと言うところだが、この席では呼び捨てにすると決めている。

「この話をする時、急に三井の耳が遠くなるけどね」

小松はわざと三井を覗き込むようにして微笑した。

三井は小さく頷く（うなづ）くびをすくめた。

小松は、聞きたいことは一つで短いと前置きをした後で、専務の目を見据え、

「田嶋は社長就任を要請されたら快諾？ それとも固

辞？…その中間は認めないから確答して」と言った。

三井がこれ以上はないというほど目を剥（む）いた。その瞬間を待つていたように女将が酌をする。

「はい快諾です。一端（いっぽ）のサラリーマンなら、いつか自分の手で経営を試してみたいと思うはず。その気概がない男は、平社員としても使い物になりません。もつとも私の持ち株は数パーセントですから話にもなりません」と意を決したらしい田嶋が本音を晒した。

「田嶋専務、だからこうして坊ちゃん、いや、忠洋さんに決断をと、こんなところまで…」

小松は一瞬だが、目を癡（ぼろ）ぼろにさせられた。父忠興が愛したこの地、この宿を「こんなところ」と称したのだ。三井は今回の話合いが自分に有利に運んだとしても、『しおのね』には泊まてはいかないだろう。小松はそう確信した。「決断はしたと言っている、ずっと前から。三井には今の質問は要らないよね、快諾に決まっている。三井は要するに、私の持ち株を誰のために使うのか決断をと、そう迫っているわけだ。現在の、というか、暫定的な代表取締役としての立場もあつて」

「はい、六ヶ月の間という遺言の内容が登記されているわけ

ではありませんが、亡き社長恩顧の者ならば、できるだけその遺志を守ろうとするのは当然ですから」

心の中に仕舞い込んだ本音というのは、心の耳さえあれば聞こえてくるものだ。一旦就任すれば遺言の内容如何にかかわらず、二年の任期いっぱい居座れる。その腹中が見事に透けて見える発言ではないか。遺族すら知らない「遺言」とやらも、真偽が危ぶまれるのだが。三井にしてみれば、会社のオーナーの地位を承継した小松が、少なくとも敵対的に動かなければ社長としてやっていける。そのためには、「自分は社長の椅子に固執していい。本当なら坊ちゃん社長」というポーズを取り続ける必要がある。そうしていれば、小松が就任を拒んでいる以上、とりあえず安泰と踏んだわけだが、そんな画策を田嶋に知られてしまった。そうなれば、有限であることを小松に告げなければ信を失う。今回の流れはそんなところだろう。小松は目の前で必死に言葉を繋いでいる三井の脂ぎった禿(はげ)げ頭を、心底汚いと思った。

田嶋はと見れば、目を閉じ腕組みをして、微動だにしない。彼もまた、三井の本音を読み取って、その腐臭に耐えているのだらう。

「女将、わるいけど次の間の窓を開けて、爽やかな風をいれてくれる？ 少し臭いが気になる」

田嶋がクワツと目を見開いた。

「すみません、少し前まではそんなに気にならなかったんですけどねえ」と女将が、慌(あわ)わてたふりをして行動に出る。

小松は女将の言い回しの妙に感じ入って、思わずニヤリとした。

「何をしていたんだね、女将。悪臭の原もとぐらい事前に見つけて処理をしておかんか！」と三井が怒鳴る。

「その通りだと小松は、三井の顔を見ながら、自分自身を心の中で叱った。

夜中の十二時を回った。

女将が一日の全ての作業を終えて、目の前にいる。今度の着物は寛(くわ)くつろぐには恰好の、涼やかな柄だ。もつとも何を抽象化したものかは定かではない。

「結局お一人とも泊まらずにお帰りになったんですね」

「すみません。用意してくださった部屋の代金は、僕が支払いますので・・・」

「いやですよお、そういうことではなくて。オーナーの坊ちやんが指定した宿を、ふつう袖にはできませんでしょう。」

お二人とも気骨がおありだと、そんなふうじに

「気骨ねえと、小松は、女将の酌を受けながら、含み笑いをした。」

「三井が帰るのは判っていましたから、田嶋を救うために僕が怒った振りをして、二人とも叩き出したんです。田嶋は自分だけが泊まつてぼくにヨイショしたと、三井に邪推されるなんて、耐えられないでしょうから」

「やっぱり、坊ちゃんは大きいわ。社長は坊ちゃん、その次の社長候補が専務の田嶋さん、ほんとはこれが一番なんですけどねえ」

「いつしよにいかがですか」と小松は徳利を手にした。

「いいんですか」と微笑んで小松の酌を受けた女将が、含み笑いをして言った。

「坊ちゃん、三井さんが社長の椅子に座っていたってこと、本当にご存知なかったんですか」

「親父が死んだ直後に、たくさん判を捺おしてるから、たぶんその中に紛れて、それを合法化する書類があつたかも」「あきれた、じゃ、どれだけの株式を相続したのかも？」

「おふくろは死んでるし、子どもは僕だけだから、全部くることは知ってたけど、数字的なことは何にも確認していないんだ、いまだに」

「天然記念物クラスの人、ですね」

二人は同時に弾けて、笑い出した。

「ところで三井さんの処分はお考えなんですか？ あ、いえ、差し支えなければ……」

「二人の人物像、女将の目にも結論としてそう映りましたか。でも、処分なんてしません。彼はなんだかんだ言っても、親父と一緒に汗と油に塗まみ(れ)れて会社を築き上げた、言わば親父の戦友なんです。処分しなければならぬのは、むしろ僕自身、それと僕自身の持つている株でしょう。相続した株が、どんな力を持っているかも知らずにいたなんて、会社にとつてこれほど迷惑な社主はいない」

「でも、売れば、お父様の会社を人手に渡すことになりますね」

「それが一番悩ましいところですよ」

女将がふつと肩を落として、話はこいで途切れた。

「女将、一緒に潮騒を聞きませんか」

数分の沈黙の後で、小松は笑顔を作つて窓辺に向つた。

濃い、灰色の水平線の上部に黄橙色の帯があり、その上には薄紫色の雲がいる。帯の真ん中が異様なまでに輝きだしたかと思うと、朱色をした大型の太陽が、ゆつくりと顔を出した。それまで近い空に溶け込んで見えなかった淡い雲たちが、一斉にその姿を現す。数羽の海鳥のシルエットが沖の方で踊っている。海が昇る太陽を引きとめ、朝陽の下部が伸びきって丸みが崩れた。それも数分、「二人」の関係はあつげなく裂けた。

小松は、やや肌寒さを感じさせる早朝の潮風の中で、波子のことを想っていた。

なぜ波子なのかは分からない。世間で言う癩(いぼ)付き、しかも、女将によれば、もう若いとは言えない三十三の女だ。癩、つまり子ども海人は羸弱(いじやく)で手がかかるし、ようやく分かつてきたのだが、ピュアな分、少々知恵遅れの感じもする。さらに、女だてらに粗野な言葉も遣う。たぶん高学歴ではない。特に教養があるとか、高尚な趣味があるとか、高いポテンシャルをもっているとか……そ

れも無い。いや、無いと思う。すこぶるつきの美人かといえ、好みによるが、一般的な見方では、違う。しかも長年漁をしてきて身体もガタガタになっているに違いない高齡の祖父がいる。介護の費用や徘徊の対策もすぐに必要になるはずだ。少なくとも結婚すれば、彼もまた扶養の対象になるのだ。それだけの資力と覚悟が自分にあるのか。まずはそれだと思っ。

波子の「からだ」がほしいのか、と小松はさらに自分に問う。もつと言えば、女に飢えているのか、とも。即座に『まさか』との答えが返ってきた。東京の某所に行けば、肌と肌の間にお金が挟まる関係の女は何人かいる。一夜十方。一人の例外も無く容姿端麗で人柄もいいのだ。顔を見せるだけで、誘いもしないのに何人もそうした女が寄ってくる。だが、彼女たちが欲しいのは小松という男の体でも心でもない。金だ。それが哀しかった。

好きという感情には理屈はいらない。好きになった波子に、死に別れた夫がいて、一粒種の海人がいて、高齡の祖父がいる。それだけのことだと、小松は、立ち上がった。

防波堤の上から見ている太陽は、もう赤くはない。小さくなって、光り輝いている。

それにしても、と小松は思う。「しおのね」の女将は何故、波子との間が進展するよう図るのだろうか。不思議といえば不思議だ。出会いの場となった病院での彼女の激怒から推して、女将と波子に特別な関係があるとは思えないのだが……。

おなかが小さくグウと鳴いた。

海人の髪が揺れている。

小松はその後ろを、少しだけ興奮しながら追っついていった。いつものハーバーで海人は、小松が「どこに行くの」と聞く

と、「じいちゃん」とだけ言って笑顔を作り、歩き出したのだ。

波子の祖父に会う。海人は「じいちゃん」と呼んでいるが、彼にとっては曾祖父にあたる。

海人は、今度もまた胸を張って、案内をしていく。

老人は新しく出来つつある海の公園の突き当たりで、碑（いしぶみ）と見紛う硬さで立っていた。寝起きのままなのか、真つ白な髪が四方に飛び跳ねている。

「つれてきたよ」

海人の言葉に老人はゆっくりと振り返った。

海はあくまでも碧く、降り注ぐ日差しは付む三人に、温かさで短い影をくれている。

「小松です」

それに付け加えるべき波子との人間関係はまだ出来ていない。

「波子の祖父です」

彼もまた、私に関して同じことを思ったらしい。挨拶が丸太ん棒のまま返ってきた。

『だとすれば、なぜ自分に会おうとしたのだろうか。自分もまた、なぜ来たのだろうか』

小松は小さく首を傾げた。

「波子や海人に構わんでほしい。このとおり……」

老人は天辺の頭皮が透けて見えるほどに深く、頭を下げて、唐突に言った。

「老人、待つてください。どうか頭を……」

「磯吉といいます」と顔を上げた。両の目の端に目脂があった。

「私は娘さんやこのお孫さんが好きだから、おつきあいをさせてもらっているだけ」

「それが分かるからお願ひしている。あなたはせつかく穏やかに
なつた海を、波立てて、荒れさせて、素知らぬ顔で去つていく
風に過ぎん」

「いやそれは」

「黙つて聞かんかい」と老人は、突然癩癩かんしゃくを起した。

海人が驚いて、老人の腹を小さな手でぶつた。好きなおじ
さんをいしめるな、とでもいうように。

「絵をかいてるだけで、生活してるさうだな。そんな鈍なま
くらの考えで、近つかれては困るんだ。年は食つてるが、ま
つとうな仕事をしている男に、後妻として嫁がせる話が
進んでる。迷惑なんだ、正直」

老人の目が、敵意も霞あらわな威圧に変わつていくのが分
かつた。

「波子さんは、あなたのために、あなたの余生のために、再
婚させられるんですか」

小松も穏やかな会話の軌道を、あえて外した。

「あなたに何がわかる」

「あなたこそ波子さんが解かつていない。波子さんを侮辱し
ていることに気づかないんですか」

「たぶらかす目的だけのあなたに言われたくはない」

「また自分の娘を貶(おとし)めた。彼女はたぶらかされるよ
うな愚かな女性じゃない。そんなことも解からないんです
か」

「あれは淫乱なんだ。また、後家になって日も浅いのに」
「バカですね、あなたは。いま、ご自分で後妻に出す話をし
ていましたよね、後家になってまた日も浅いのに。充分、矛
盾していますよ。孫を淫乱と評するのも下品だ」

後悔はしない。小松は心底そう思った。

「波子と海人が生活できること、それが一番なんだ。そう
できない男は引つ込んで、ちよつかい出すんじゃない」

「じいちゃん、やだ、やだ、やだ……」

老人の語気の強さにもめげず、海人は、祖父の脚に組み
付いて抗議を続けている。

小松は海人に「友情」にも似た想いを感じた。

「承知しました」

老人が、言い募るべき言葉を呑みこむのが分かつた。

生活力があればいいが、無いなら引つ込めというのだから、
小松は、二人を扶養する財力があることを証明すればいい
ことになる。造作も無いことだと思つた。

「解かればいい」

老人は海人の頭を撫でた後で、ホーツと溜息をついた。

「磯吉の言うその男性と結婚したくないのよ、波子さんは間違いないわ」

女将は、一人合点で頷いた。そして、杓文字(しゃもじ)を聖徳太子よろしく手にしたまま、さらに続ける。

「だから、波子さんは、好きな人がいると、坊ちゃん(ぼく)の存在を磯吉に伝えた。縁談は断つてほしいってね」

「出来すぎた、ご都合解釈じゃないの、女将」

「いいえ、噂に聞く頑固(ごんこ)もんで出無精(でむせう)の磯吉が、わざわざ出てきての強談判(ごうだんぱん)でしょう。波子さんの坊ちゃん(ぼく)への想いの強さに、磯吉が不安を感じた……それ以外に考えられないわ」

確かに、ご飯(ごはん)どきの気軽な話で波子が自分のことを持ち出すとは思えない。小松は、やっと手渡してもらえたご飯茶碗(ちawan)をお膳(ごぜん)に下ろすと、フツと笑った。あの老人が結果的にキューピッドになるかも、と。

「ご飯どき女将」

「はっ。」

「その磯吉が……この名前、何とも呼び捨てにしやすい」

「そういえば」と女将がクスンと笑った。

「波子さんのことを淫乱(いんらん)で言ったんだ。その場で口を極めて磯吉を責め(せ)めたものの妙(た)に気になつてね。何か知つていたら、教えてくれますか?」

女将の顔が瞬時にして曇(くも)った。

「これは、坊ちゃん(ぼく)が……」

「秘密(ひみつ)は守ります」

「いえ、信じるかどうかは、聞いたその人次第(じじ)で話(わ)なんですけど」

小松は、味噌汁(みそぢゆ)の椀(わん)を手にして次の言葉(ことば)を待(まち)った。

「以前(いぜん)お話(わ)した、海(うみ)で死(し)んだ夫(つま)、あ、総司(そうじ)そうじつて名前(な)なんですけどね。その総司(そうじ)の父親(ちち)の幸造(きんぞう)とできていたつて噂(うわさ)がたちましてね、今(いま)から五(ご)、六年(ろく)ほど前に」

「まさかあ」

「ええ、わたしは当時(たうじ)も信じ(しんじ)ませんでしたけど、浜(はま)ではけっこう真(ま)まことしやかに。ただ……幸造(きんぞう)が、つまり舅(ぢゆう)しゅうとが、波子(なづな)さんをレイプ(レイプ)したのはと、そっちの方(かた)なら、可能性(かうせいせい)はあります」

「で、その舅(ぢゆう)とは、いまも同居(どうきゆう)……」

「いえ、総司が死ぬ一年前に、やっぱり海の事故で命を落としてます」

小松は、驚いて生じた喉の渴きを癒すように、味噌汁を啜り、ゴクンと音を立てて嚙下(えんか)した。

「その噂、当の総司さんは知ってたの？ たとえば誰かが噂の存在を報らせたとか」

「報らせたりしたら、その人が殴られて半殺しの目にあったでしょう。少なくとも総司の性格を知っていたら、絶対言わないでしょうね。波子さんに、べタ惚れでしたし」

「惚(ほ)れていても、女遊びはしてた……」

「ええ、女好きは父親譲りでしたから」

「凄い話があるんだね、こんな静かな集落に」

小松は腕組みをして、小さく唸った。

『しおのね』に来てから何日になるだろう。一日二万円、一月で六十万円。定宿と言つても、頻繁に利用するようになったのは最近のことだが、その使用料は、毎月小松忠興名義の預金口座から落とされている。考えてみれば、温泉と磯の香りが売りの、家政婦つき貸貸マンションのようなものだ。小松にはそれが、大層な贅沢だという感覚が無い。

小松が描いた絵は、東京のギャラリーで個展を開くたびに、四、五作は売れる。価額はそれぞれの号数で異なるが、「売上」の総額は毎回百万前後だ。むろんそれだけで食えるわけはなく、収入乃至財産としては、それに父忠興が生きていた頃は定期的な仕送りが加わり、忠興の死後は莫大な、と言つていい遺産が加わっている。いずれにせよ、女将の言うところの『坊ちゃん』には違いない。普通なら親の庇護、援助で暮らしていれば、どこか忸怩(じくじ)たるものがあるはずなのだが、それが無いところ、あつたとしても周囲にそれを感じさせないところが、生来の『大きさ』と言えるかもしれない。

小松は、何回か波子を抱く夢をみた。その中でも忘れられない『作品』がある。

どこの海かは分からない。微粒状の空気が、射し込む日光の力を借りて、活き活きと上下左右に踊っている。その群れの向こうから、波子が全裸で泳いでくる。酸素ポンベもないのに息苦しそうな様子が無いばかりか、微笑んでいるようにも見える。主人公らしい「私」も、どんどん彼女の方へと寄つていく。波子が海水の中で真つ直ぐに立つた。別の生き物のように揺らめく長い髪、「私」への言葉が全て泡と

なつて昇つていく。広い額と濃い眉毛だけがはつきりと分かる。白い乳房の小動(こゆる)ぎが「私」の中の男を誘う。自然に視線は下がり波子の女を捉える。引き締まった下肢の根元に、密集して生えている恥毛という名の海藻。急に「私」の呼吸が乱れ、鼓動が極限まで高まる。海水が「私」の想いを受け取り、その波動を波子に伝える。苦しい。死に至る直前の悦楽がそこにはある。波子は肯うなずくと、穏やかな表情のまま、光の分子に支えられるようにして横たわった。徐々に「私」の目の前で開かれる「女」。波子の股間に吸われて行く、キラキラとした微細な珠たまの群れに載つて「私」は、ついに言葉を口にする。「波子、ぼくは」……海が一気に口腔を満たし、言葉はそこで塞せき止められる。狼狽した「私」の前に、波子の女陰を隠すようにして現われた海人の真つ青な顔――

小松は、海水ならぬ寝汗で、ぐつしよりと濡れた自分を、独り床の上で見詰めたものだ。

とにかくもう一度波子に会うきつかけが欲しかつた。

もう女将の配慮には頼れない。それも事実だ。思春期の男の子が、好きな女の子に想いを伝えられないで困っている。そういう歳でも、レベルでもないのだ。

海の男のつもりでいた自分が、陸の船とも言える車、ランドクルーザーを買った。運転免許はもちろん持つている。ハンドル捌きも並みのタクシー運転手程度にはいいはずだ。誰のための「宗旨替え」かは知つている。何のための車かも、自分自身には見え見えでいい。小松は波子の祖父が言い放つた「攻撃」に拘つていた。

ワイパーがメトロノームのように時を刻む。進行方向の右手に続く、溼(じ)んだ灯の数々……真正面には岬に向う幾筋もの光の破線。左手には、潮騒が聞こえるだけで何一つ見えない、真つ黒い海が、その広さだけの空間が、居座つていない。いくらアクセルを踏んでも、目的地に近づけるわけではない。波子の住所さえ知らないのだ。女将にも聞いた。知らなかった。「あの辺り」という大まかなこと以外は……

海から見た潮の香の町、海人と出会つたハーバー、その停泊港から『しおのね』までの道。そのほかは初めての土地を訪れるのと大差が無い。本当に「知らない町」だった。国道を外れて、町の道に入るたびに「行き止まり」の立て札が現れ、車の体格の良さから苦戦のUターンを強(し)いられた。

『とにかく町中を走り回ろう』

波子や海人と遭遇する確率はゼロに近い。ましてや夜の八時なのだ。

小松は自分から東京に赴いて田嶋専務に会い、率直に聞いてみた。「精密機械のことを何一つ知らない僕で、社長職が務まりますか」と。

田嶋の応えは、好意的且つ明快だった。

「先代も旋盤はからきし駄目でしたよ。職工なら技術は不可欠ですが、坊ちゃんに求められるのは専門知識や工作技術じゃなくて、器量です。社員をやる気にさせて人を纏めていく器の大きさです。かえって細々(こまごま)したことを知らないほうが、うちの会社の場合うまくいく。みんなで社長の面倒を見ようって言うてね。坊ちゃんがその気になったのなら、協力は惜しみません。いろいろ鍛えてさしあげます。それに、うちには他社に無い極め付きの特許がある。先代と私が開発したものなんです。これがあつる限り、うちの会社は揺るがない。坊ちゃんは大船に乗つたつもりで社長の椅子に坐つていればいいんです」

『前回の『しおのね』の自分の言動は、どうやら田嶋のめがねには適つたらしい。きつと叩き出す形を採つた真意も、

その場で察したろう。どつちが面接試験をしたのかな』と小松は、ハンドルを一つ叩き、声を出して笑つた。

実際に十分な財力がある。しかしその事実だけでは世間は納得しない。それを誰の眼にも明らかな形で、示さなければならぬ。恐怖、危惧、期待、安心……全て心の中の動きだが、それらを誘発したり担保したりするのは、金、肉体などの具体的なものなのだ。小松は、老人の出現で改めてそのことを確認し、世俗的になる覚悟を迫られていた。

6

目の前の小さなヨットが、ゆつたりとした動きで、ハーバーの波と遊んでいる。頭の真上にいる太陽が、小松の肩や背中を温めている。足元で、寄せてきた「波」が、小さくちやふんと跳ねた。

「小松さん」

女の声に振り向くと、海人を連れて山の美術館に出かけたあの日のままの波子が、立っていた。

笑顔で、ゆつくりと立ち上がった小松に波子は、「あの美

術館で、生意気なことを言ったシーンから先の方、やり直しちや、いけません？」と、真つ直ぐな目をして言った。

「僕もそうしたかった……ずっと」

小松は、学生がよくそうするように、握手を求めた。

「手は嫌(いや)、恥ずかしいから」

ひび割れて、ささくれて、タコさえ出来ているから。小松には、そう聞(こ)えてくる。

「だからこそ握り締めたいんです」

小松は、優しく微笑(わ)んで促(う)めた。

「あのとときの、中途半端な求愛の言葉を全部、貴女に言いなおしたい」

波子の瞳(ひとみ)が潤(うる)みだした。

握(にぎ)った手(て)から、熱(あつ)いものが伝(つ)わつてくる。

「云(い)いたかった、ほんとに……」

波子の頬(ほ)が、ためらいながらも小松の胸(むね)に触(ふ)れた。

「僕(ぼく)も……と小松は応(こた)えて、髪(かみ)を撫(な)でた。それが自然(しぜん)かどうかは分からないが、ただ慰(なぐさ)めたいと、そう思った。意(い)に染(し)まない後(あと)妻(つま)の話(わたり)に日々悩(なや)まされてきたらう波子(なみ)を。

「だって、何(なに)にも……何(なに)にもわたしには無いんだもの」

「同じだよ」

あるのは、父親(ちち)が汗(あせ)と知恵(ちえ)で蓄(たくわ)えた金(かね)だけだ。世間(よ)がどう思(おも)おうが、それは本来的(ほんらい)に自分の価値(かち)ではない。そう思(おも)っている。ただ、いまはそれを唯一(ただひとつ)の武器(ぶき)に、「相手(あいて)」の男(おとこ)と戦(たたか)わなければならないのだ。

「海人(うみ)は？」

ある目的(とく)が、この問(と)いに結(むす)びついた。

「おじいちゃんのところ」

波子(なみ)が小松(こまつ)の背(せ)に回(ま)した手(て)に力(ちから)を入れて、言った。

「きょうは海人(うみ)を忘れて。お願い」

小松(こまつ)も実はそうしたかった。

「ひまわり」のワンプ。ースから抜け出(で)た波子(なみ)は、着衣(ちやく)のときのスラリとした印象(いんげん)とは違い、グラマラスだった。満(み)ちるところは満(み)ち、引(ひ)くところは引(ひ)き、繰(くり)返し揺(ゆ)れる肌(肌)に滲(しみ)出る汗(あせ)さえ、潮(うしほ)の香(か)りがする。

『夢(ゆめ)の中の波子(なみ)とつながっている』

肢体(てい)はしなやかで、結(むす)ばれた部分(ぶぶん)を越(こ)えた両(りょう)の足先(あし)は、小松(こまつ)の肩(かた)の近く(ちかく)で妖(まじ)げに揺(ゆ)れている。

ゆらゆらと左右(さゆう)に動(うご)く顔(かほ)。半(はん)ば開(あ)けた口(くち)が、吐息(とそ)の間に幾度(いくど)となく洩(あ)らす言葉(ことば)が、小松(こまつ)を別(わか)れの世界(せかい)へと誘(いざな)う

う。

「離さないで……連れてって」

人の話からしか推測できないが、女遊びが好きだった亡夫総司への潜在的な嫌悪、自分をレイプした今は亡き舅幸造への恨み、老醜をさらして僅かな生活援助を期待し、強いて再婚を迫る祖父磯吉、素直だが病弱に過ぎる息子海人、さらには、自慰に頼らざるを得ない性欲の処理。或る意味では「女としての地獄」が続いているのが、いま、抱いている波子だ。小松はそう思った。

「連れていくとも、きつと幸せにする」

小松は口移しの言葉で、自分が行くべき道についての、迷いを消した。

『自分なら、いや、自分だけが波子を救える』

それは確信に近くなった。なぜなら、海人がいるからだ。他の男にとつては、邪魔でしかないだろう。世間で言う「瘤」が、小松にとつては癒しなのだ。

「もう何も、分らない……どう思われても、いい、あなたの傍がいい」

波子が、小松の男を唾くわえては離す、その間(はざま)で、苦しそうに言葉を繋ぐ。

「波子さん、いいんだ、そこまでしなくても」

「ううん、あなたの全てがほしいの」

唇から糸を引いて見上げた波子の、瞳が見る見るうちに濡れていく。

小松はその、涙の奥を見詰めているうちに、次第に「本来の自分」を見失っていくのが分かった。

「え、私のために次の取締役まで、ですか。私が次期社長、そういうことですか」

電話の向こうで田嶋専務が、そう言った後で絶句した。息遣いで興奮しているのが分かった。

「よく考えました。社長の椅子は包括承継の対象外です。預金や現金や株式とは違う。しかるべき方にお任せするのが一番と、そういうことです。父もあなたに譲るなら、泉下で微笑んでくれると思います」

本音だった。波子や海人の扶養のためにも、将来のためにも、事業の失敗は許されない。航海術も知らないズブの素人が荒海に船出するような愚は、決して犯してはならないのだ。

「三井専務には、私から？」

「いえ、私からこの後すぐに電話で、さらに代表取締役に対しての正式文書として、意向を伝え、早期の取締役会招集を求めます」

「決断は、本気なんですね」

それは疑うという感じではなく、驚きの確認といった風だった。

いつも見ている海とは違つ、真つ平らで漆黒の海が遙か彼方に広がり、その海を海と知らせるべく、まるでふち取りでもするように、大小の宝石にも似た灯が取り巻いている。煌めきながら、囁きながら、その光の群れはさらに丘へ、山へと登つている。大勢の人たちの生活が、そのままキラキラと点滅しているのかもしれない。小松はそう思った。「少し寒いわ」と波子が小松の腕にすがつた。

「この眺望の素晴しさをくれたのは、風なんだね、きつと。空気が澄み切つてる」

抱きしめた波子の体が確かに冷えていた。

展望台の突先にクルマを停めて獣のように交わつた後の、極限まで火照つた体には、車外の空気は真冬のそれだったろう。

小松は、「景色を見よう」と誘つた配慮の無さを、少しだけ悔いた。

「そろそろ行きましょう」

大きく頷いた波子のおでこが、小松の胸に当たつた。

「結婚してくれませんか」

セックスの残り香でむせ返るような車内に戻つてすぐ、小松は決意を口にした。ルームランプが消えないように、意識的に半ドア状態にしている。

「はい」と波子が、小松の顔を見詰めて言った。

その後で頬に付いた前髪を、指先でゆつくりと退けて。

「ありがとう」

「お礼つて、なんか変です」

その通りだと、小松も頭を掻いた。

「挙式の準備とかあるので、半年後ぐらいになると思うけど」

会社の新体制作り、新居の建築、海人の教育プラン、磯吉の事前の始末、…「始末」とは無礼な言葉だが、相手が金銭中心の考えなら、金で生活を保障し「容喙」を禁じるしか方法はない。小松は、これらのためには相当の株式換金措置が必要と踏んだのだ。その前提として、資産状態の

確認もしなければならなかった。

「今すぐじゃ、なぜ、いけないんですか」

口だけではなく、波子の目も抗議をしている。

きつと、優柔不断の「先送り」と受け取ったのだろう。そうだとすれば、波子は「絵本美術館のときのまま小松」を、今また見詰めていることになる。

小松は縷々説明をしようとして止めた。この期に及んでの「延期」が、自分自身をちびた存在にしてしまうと感じたのだ。

「性癖なのかな、こんな大事なことで、完全に準備してから、なんて考えてしまつて。ごめん。すぐに婚姻届を出そう。そのほかの付帯的なことは、後でいい。それでいいよね、波子さん」

波子の瞳が漸く潤んでいくのが分かった。

「ごめんなさい。わがまま言つて。あなたが、いまこのときに結ばれなかつたら、あなたが、どこか遠くへ行つてしまうような気がして……」

大粒の涙が波子の頬を伝つていく。

「そつだ、同時に海人を養子にしよう。養子縁組、僕のこどもに。いいよね、当然賛成してくれるよね」

波子が手の甲で涙を拭うやいなや、首を振つた。

「それは駄目です。そこまで甘えられませんが」

「夫婦になるんだ。甘えは当たり前じゃないか。嫌々なんじゃなくて、僕は海人が好きなんだ」

「いいえ、ご好意だけで……それだけはしないで」

「そんな言い方、よせよ。変じゃないか」

「きつと後悔するつて分かつていて、はいなんて言えません。あなたはあの子のことを何も知らないから」

「知らないつて何を。海と父親に少しばかりのトラウマがあるからつて、それが何なんだ。純真無垢な子だから、幼く見える、僕はそう思つてる」

「ありがたい、そんな風に見てくれて。でもそういうことではないの。いまは言えないの。だけどとにかく」

波子の顔が俄かに紅潮し、涙が両の目から溢れ出した。

それは波子の心に堆うずたかく積もつた暗い何かを、洗い流すような勢だった。

「何をこだわっているのか、言つてくれないか。謎々してるときじゃないんだ。いま、結婚の話をしていて、早いほうか言いと君から言い出したんだよ」

小松は少し苛立った。

「養子にするってことは、たとえば私がいなくなつたとしても、死んだとしても、親であり続けるってことでしょ」

「当たり前じゃないか、喩たとえは縁起でもないけど。それが親子だろう」

「ありがとう……だからなの」

何か病気を抱えているのかもしれない。小松はそこに波子の涙の源を感じ取つた。

『あの、病院の先生に聞こう』

俯(うつむ)いた波子の髪を撫でながら、そう思つた。しかし、井上先生といつた……

波子がまた、しがみつくようにして唇を寄せてきた。激しく応じると、潮の香が口腔を満たした。涙の中の海の香り。

フロントガラスの向こうで突然光つた二つの目が、ゆつくりと動き出して傍を通り過ぎていく。

『向こうも若い男女だ』

舌を入れて目を閉じる前に、そんなことを思った。

7

見上げると背の高いワシントン椰子が、濃厚になりかつた空をバックに、真つ黒なシルエツトで揺れている。そのまま視線を落とすと、花を失つた夾竹桃の葉の群れがざわざわと低い音を立てている。

そのまま後退りして、海と陸とを隔てる金属製の柵に背を凭もたれた。

もう何年もやめていたのに自販機で買つてしまつたタバコを手にする。口にくわえ、左掌を風よけにしつつライターを擦る。喫うと目の前にほのかな灯りが点いた。

「波子をどこに囲つた。女の体欲しさに誘拐なんかしてそれでもいいつばしの男か。一緒に来い、警察へ」と、入れ歯を飛ばさんばかりにして磯吉が言つた。

波子の失踪は突然で不可思議なものだつた。

同道した警察署で磯吉から聞いた事実——磯吉が気づいたその日は、小松が結婚の支度金として、また磯吉の扶養補助としての一時金として一千万円を波子に手渡した日の翌日にあたる。

磯吉の強い反対を止めるには経済力を見せつける必要があつた。一番好まない方法だが、効果は十分に期待できた。

然し、波子はどう感じたか……

彼女は海人を残したまま、フツと消えたのだ。磯吉によれば、お気に入りのバッグも持たず、着替えすら持つて行った形跡は無いという。

「一緒に婚姻届を出しに行っている私がなぜ、彼女を略取誘拐する必要があるんです？」

警官の問いに問いをもつて応えた。

矢継ぎ早の詰問に対して自分から進んで供述した一千万という支度金の出どころも不審思われたらしいが、本社所在地、自社株の保有数、銀行口座番号、さらに絵に関しては馴染みのギャラリーの数々と、調べればすぐに確認できるといふ具体的な事実を告げると、警官の態度が一変した。犯罪の被疑者から被害者への移行というわけだ。一番驚いたのは磯吉かもしれない。平身低頭で謝罪したうえ、涎でもこぼしそうな小松への揉み手が醜悪の極みだった。ただ、その態度からして「磯吉には金が渡っていない」と、それだけは感じ取った。

波子は何を考えて海人を棄て、どこに行ったのか。

警察に出頭した翌日、波子の失踪から四日目、藁をもつ

かむ思いで井上医師を訪ねた。きっと彼女周辺の何かを知っているかと踏んだのだ。ただ、医師には法的な守秘義務がある。途中、戸籍役場に立ち寄って戸籍謄本を取った。秘密でも夫にすら話せるものがあるはずだと。

「どうですか、波子がねえ……まあ、どうぞ」

謄本を手にしたまま医師は、まるで患者にでもするよう椅子に掛けることを「指示」した。

「この転籍後の新戸籍によると海人を養子にしていますよね、これだと身分法上丸抱えだ。これ、波子がかつて求めたんですか」

「いえ、彼女は養子縁組に反対でした。そこまでは甘えられないと言いつつ」

一瞬、愛車の中で見た波子の涙顔が浮かんだ。

『波子、なぜ消えた、何も言わずに』

「お話ししてもいいでしょう、いや、むしろ小松さんには知る権利があるかもしれません」

「はい？」

「海人は波子の夫総司の子ではなくて、総司の父親、波子にとつては舅にあたるわけですが、その舅幸造と波子の間にできた子なんです」

「噂は事実だったのか」小松は肩を落としました。

「むろん戸籍上は総司の子。もしかしたらこのことを確認するものとして知っているのは波子と私だけかもしれません」

しかし例え直接井上医師に伝えたとしても「確たる」と言えるのかどうか。

「いまならDNA鑑定で親子(しんし)関係を明確にできますが、血液型でもあり得ない親子関係というのはわかりません」

心の中の疑問をすぐ察知したような医師の反応に少しく驚いた。

医師によれば、波子の周辺は全員A型だが、夫総司とその母親はAAのA型、舅の幸造はAOのA型、波子はAAのA型だ。ところが海人はAOのA型を呈した。同じA型ということで総司は疑うこともしなかったが、AAとAAの間の子としてAO型の子は出てこない、幸造と波子の間だからAOの海人が生まれたと、こころなまる。

「お気の毒と言つてはかえつて失礼ですが、うーん」

井上医師は腕組みをして目を閉じ、しばらくして、瞑目したままで呟いた。

「この海人との養子縁組は法定代理人波子の代諾ですから

たとえ急ぎたくても、離縁も代諾。すからねえ」

手段が無いわけではないが、波子が現れない限り、養子縁組の解消は難しい。医師の言葉の意味はすぐに解った。

手にしているタバコが短くなつて、「消火せよ」とその熱の強さで警告を発していた。

「騙されたのかな」

靴底でタバコをもみ消すのにも苛立ちが混ざつた。ただ、それでもまだ、そうとは確信できない自分がいた。波子は婚姻という契約で正式に約束したのだ。二人で一緒に人生を生き抜こうと、言葉でも約束したばかりなのだ。そのことは、少なくとも小松の中では重い。何か事情があつたのだ。そう思ひたかつた。

国道に面した駐車場に戻り、愛車の中に潜り込むと、あの夜の、波子の女の香りが嗅覚に触れた。

ため息が出た。いろいろあり過ぎたこの一週間……

「え？ 田嶋社長、どういうこと」

小松は一昨日の午後、驚天動地の報告を受けた。彼によれば、三井は既に失脚していたが、社長在任の末期、会社の工作機械に関する重要な特許を競争会社に売却してい

たというのだ。

「坊ちゃん、あれが無ければきつい。そこらの中小企業と何も変わらない会社になっちゃまう」

「売却先はどこ？」

「うちのライバル会社の五和精機工業です」

「特許を売ったつてことは、会社を売ったと同じ……」

「ええ、復讐でしようかね、奴にとっては。売買代金そのものは全額、契約書通りの期日にうちに入りました。私もそこで初めて知りました。単純な金目当りとは思えません」

「株価は？ 上場は、二部たっけ」

「いえ、東証のマザーズです。それでも株価は動くわけで、暴落です、しかもまだ下げ止まっています」

「とにかく親父が創って遺してくれた会社です、よろしくお願ひします」

「あらゆる手を使つて頑張ります。坊ちゃん、どうか気を落とさずに」

目の前の、駐車場の外灯がかすんだ、薄つすらと滲みだした涙が「犯人」だ。小松は、自分の落ち込みを振り切るように強く首を振つて、エンジン掛けた。

女将がお櫃から飯をよそつて、小松の大名膳にそつと載せた。

雪見障子が浜の松が揺れているシルエツトを映している。

「坊ちゃん……」

「あ、はい？」

我に返つた小松の目の前に女将の笑顔があつた。

「憎んでらつしやる？ 波子さんのこと」

「まだ……」

浴衣の袖に交差させた両の手を差し込む。寒かつた。心の奥底が冷えている。

「感情の処理ができていないんです」

波子の失踪からひと月近く経っている。

「お痩せになつて……ちゃんと召し上がらないと。お味噌汁、温めて来ましようね」

「女将——」

立ち上がろうとした女将が正座に戻つた。覗き込むようなまなざしが次の言葉を催促している。

「レイプした男、幸造への復讐でしようか、海人を棄てた理由ですけど。他のことはいんです。お金のことも、僕の感情、心の始末も。でもね、あの海人を事実上棄てたこと、

「そっだけがどうしても納得いかないんです」

多少の無理はあつたが、小松の本音だつた。

「波子さんはあの子を棄けたりしませんよ、坊ちゃんだから安心して預けた。そう思います」

「しかし愛情がそもそももあるもののかな、レイプした義理の父親の子になんて」

言葉が荒んでいるのが分かつた。

「レイプじゃないんです」

「えっ？　じゃ何」

「そつ、井上先生も言わなかつたのね、そこまでは」

「まさか」

「ええ、あつてはならない不倫だつたんです。しかも心までしつかりつながつての。だから、坊ちゃんが怒つて縁組を法的に無効にして手離れた後で、さうと引き取りに来る。わたしはそう思つてます。坊ちゃんを騙してまで、そうせざるを得なかつた事情の方は、さすがに分かりませんか」

「じゃあ、出会いのときの、あの謝るつていう台詞は」

「憶えてらしたのね、わたし、あの子が死んだら、何て謝つたらいいか……波子さんは誰に謝るんでしょ。坊ちゃんは亡夫の総司と思つたんじゃありません？」

「もちろん、誰だつてそう思う」

女将は続けた。総司の波子への愛情表現は極端に身勝手だ、暴力的だつたらしい。嫉妬心も並外れていて、波子に近づく男への報復も常軌を逸していたという。言わば被害者の波子を陰で慰め、そればかりか総司の乱暴から身を挺して波子をかばつたのが幸造。波子は感謝の想いを重ねるうちに、歳の差も、人の倫に反することも十分意識しつつ、いつしか「けもの道」に足を踏み入れてしまつたようだと。

「総司に知られずにそんなことできるのかな」

小松はさすがに訝つた。波子が亡夫について　最初に語つ

た人物評

と違い過ぎるからだ。あれが話に聞く舅のことなら解かるのだが。

「総司は女遊びが性癖、ということとは外泊が多いつてことですよね」

「そつか、家には一人が残る」

「ええ」

小松は大きなため息をついた。女というものの、いや、波子という女の、極限の哀しさを想つたのだ。その現場に踏み込まれたら、総司に殺されるに違いない。文字通りの命

がけのセックスが女体にもたらす悦楽は、悪魔的過ぎて想像すらできない。

8

「実は坊ちゃん、幸造の海での事故死には謎が多いんです」

「もういいー！」

小松は大声を出して耳を塞いだ。

「もういいよ、勘弁して女将」

「ごめんなさい、坊ちゃんの気持ちも考えずに」

女将が畳に両手をついて頭を下げた。

「いや、僕が質問したからだ、僕こそごめんなさい、感情的になつて。お恥ずかしい」

そう言うのと小松は、茶碗を手にして飯を掻きこんだ。反射的に涙が溢れ出た。

女将が胸元からハンカチを出して目頭を拭いている。

その姿を鏡として、小松は更なる涙を噴き出させた。いったい何を哀しんでいるのか。誰のために泣いているのか、

大の男が人前で鼻水を垂らし咳き込むようにして。

波子が金を抱え、海人の寝姿を何度も振り返つて見て、

髪を振り乱して駆け出す姿が見えた。救いようもなく惨めで、抱きしめたいほどに不幸な姿だった。

かがんでいた目の前の山が、取り囲んだ雲の群れの上昇とともに立ち上がつて、あつという間にその全容を現した。陽の光が、薄ぼけた山の衣を鮮やかな広葉樹の緑に変える。

防波堤に描かれたイルカがいつもより元気そうに見える。自分がいま見つめるべきものを、はつきりと見据えたせいかもしれない。小松はそう思った。

「女将は波子の秘密を知っていた。それなのに僕と波子の仲立ちをした、いや、恨み言でも非難でもないんだ。ただ、どうしてかつて、そう思つてね」

二人で涙を出し切つたあの日、小松は咳くようにして訊いてみた。

女将は答えようとしてた口を閉じて威儀を正し、再び畳に手をつけて深々と頭を下げた。

「坊ちゃんが波子さんに魅かれているのがわかつたから、というの答えの一つです」

ゆつくりと上げた顔には、キラキラと輝く二つの眼があ

つた。また涙で潤んでいたのだ。

「でもそれは綺麗過ぎます、理由として。坊ちゃんも気付いているはずですが、仲居の数がどんどん減っているのに。このところずっと苦しくて。ずるいんですよ、わたしは。この旅館が坊ちゃんや坊ちゃんの会社から見棄てられたらうて、それが怖かったです。まさかこの歳じゃ、まさかこの歳になつて……堰が切れたように女将の眼から涙が溢れだした。「坊ちゃんの女にはしてもらえないでしょう、だから」
「じゃ、親父は」

小松は次の言葉を飲み込んだ。

「ごめんなさい、ずっと可愛がついてたいてました。お手当も。だから続けて来られたんです」

「どう、でしたか」

どこかで気になつていた。その程度だった、キューピッド役就任の理由。まさかそれが旅館経営の破綻防止策だったとは。小松の中で一瞬だが、一陣の冷たい風が吹いた。

「母は、女としてのあなたの存在を知つていたんでしうか」
亡き母のために聞いておきたい気がした。

「はい。奥様公認のような、そんな形で……すみません」

小松は頑なになりかけた心を少し和らげた。

右の手を引かれる感覚で我に返つた。

「パパ、おクツぬいでチャプチャプしていい？」と小さな手持ち主が言った。

「海人、とうちゃんでもいいよ、無理に。パパつて言わないでも」と小松は微笑しながら海人のおでこをチョンと突いた。

「かあちゃんがそういえつていったモン」

「え、いつ？」

胸がザワザワつと騒いだ。

「どつかとおいと、へい、くまえ」

遠い所、それは距離だけではなく、全くわからない世界へと波子は消え去つた。そんな気がした。

「それにね」

「うん」

「とうちゃんはこのチャプチャプしたウミのなかにすんでるんだつて。そういつてた、かあちゃんが」

幸造の死体は上がつていないと女将は言つた。総司の遺体は引き上げられている。だから海人の言う「とうちゃん」とは、幸造という名の「じいちゃん」のことだ。

「それで海人はチャプチャプするのが好きなんだ」

「うん、とうちゃんのかおしらないけどね」

その筈だ、「事件」は総司のことを指しているのではないのだから。

「おおきくなるまで、なんかいもこにきて、うみをのぞいていけばみえるようになるって、とうちゃんのかお」

成長していけば、海面に映る海人の顔は確かに、実の父親に似てはくる。

小松は、波子の幸造への愛の深さに感嘆した。ついで名状しがつたい嫉妬の渦に巻き込まれた。

海人が返事を促すように小松の袖を引いた。

「ああ、うんうん、チャプチャプしな、ちゃんと見ててあげるから」

「うん！」と海人は仕度を始める。

小松は海の香りを胸いっぱい吸うと、ヨットの横に立てであるカンバスに向かつて歩き出した。

「ハ。ハア」と海人がはしゃぐ声をした。

「あ。あの波子が創ったボトム、…海にいたのはとうちゃんじゃなくてハ。ハだった…」

秘密が波子の中で徹底されている。

潮風が小松の背中を柔らかく前へと押した。